

経験から学ぶ力を育てる

— 成長を促す振り返りとは？ —

■講師



塩崎 俊彦
(高知大学 総合教育センター 教授)

上智大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学。専攻、日本文学。2007年より高知大学総合教育センターで、FD研修プログラムの作成・実施や授業支援に取り組む。

■プログラム概要

学生の自発的な学びを促すためにアクティブ・ラーニングを導入した大学の授業が注目されています。インターンシップ等の学外での学びの機会も増えてきました。あるいは、スタッフ・ポートフォリオなどで自らの業務を振り返りながら、今後の改善に繋げていく試みも見られるようになってきています。これらに共通しているのは、いずれも経験から得られた気づきをもとに次のアクションを起こす、という考え方です。

この研修では、グループワークとミニ講義を通じて、個々の経験から次につながる気づきを与えるための質の高い振り返りとはどのようなものかを考えます。

1. アイスブレイク
2. グループワーク「学生や同僚の変化・成長」
3. ミニ講義「経験／プロセスから学ぶ力」
4. グループワーク「授業・業務に振り返りを活かす方法」

■主な受講対象

授業にアクティブ・ラーニングの要素を導入している／しようと思っている教員
振り返りを職場の業務に活かしている／活かしてみたいと思っている職員
インターンシップなど課外の取組を学生の成長に活かしたいと思っている教職員

■本プログラムの到達目標

1. 質の高い振り返りを促す3つの要素を説明できる
2. 学生や同僚の変化・成長のキーワードを説明できる
3. 自分の授業や職場で振り返りを取り入れるアイデアを一つ説明できる

■日時・会場・受講定員

日 時 : 平成26年8月27日(水) 10:00~15:00
会 場 : 高知大学 朝倉キャンパス 共通教育1号館 125番教室
定 員 : 60名

SD

プログラム番号 2701B

SDコーディネーター養成講座

■講師



秦 敬治(愛媛大学 教育・学生支援機構教育企画室副室長・教授)
西南学院大学商学部経営学科卒業。九州大学大学院人間環境学研究科発達・社会システム専攻修士課程修了。同専攻博士課程単位修得満期退学(教育学博士)。学校法人西南学院本部・大学経理課係長(主査)、愛媛大学経営情報分析室助教授、教育企画室准教授を経て現職。愛媛大学教職員能力開発拠点SDC/SPOD-SDC。



阿部 光伸(愛媛大学 教育・学生支援機構 教育企画室 講師)
東北大学大学院教育学研究科修了。専門学校での15年の教員生活を経て、東北文化学園大学に勤務(教務部長, 学園事務局長)を経て現職(広報室副室長兼任)。



吉田 一恵(愛媛大学 教育学生支援部 部長)
愛媛大学法文学部法学科卒業。愛媛大学広報室長、人事課長を経て現職。愛媛大学教職員能力開発拠点SDC/SPOD-SDCとして引き続き職員の能力開発に取り組んでいる。



米澤 慎二(追手門学院大学 教務部事務部長・国際交流教育センター事務部長)
高等学校卒業後、香川医科大学, 東京医科歯科大学, 愛媛大学等で勤務し、主に人事系を中心に業務を行ってきた。2014年4月から追手門学院大学で勤務しているが、愛媛大学教職員能力開発拠点SDC/SPOD-SDCとしても活動している。

■プログラム概要

SDコーディネーターとは、SDの実践的指導者のことです。本プログラムでは、大学職員がマネジメント能力を有する必要性を学びます。また、SPODが開発したスタッフ・ポートフォリオ(職員業績録)の有益性や導入例の紹介をつうじ、大学職員のマネジメントに与える影響や効果を学びます。さらに、SDを担当できる講師養成及び人材育成ビジョン構築支援の手法を実践的に学びます。

なお、受講に際しては、事前にスタッフ・ポートフォリオを作成していただきます。

■主な受講対象

人材育成担当者、人事担当者、研修担当者、SD講師を目指す職員

■本プログラムの到達目標

1. 自大学におけるSD講師となることができる
2. 大学等における職員人材ビジョンの構築が支援できる
3. スタッフ・ポートフォリオを作成でき、その有益性を説明することができる

■日時・会場・受講定員

日 時 : 平成26年8月27日(水)10:00~17:30
会 場 : 高知大学 朝倉キャンパス 共通教育1号館 136番教室
定 員 : 32名

研究支援職員としての基礎知識

—ゼロから始める研究者との協働—

■講師



宮内 卓也
(高知大学・法人企画課・主任)

平成 15 年高知大学就職 総務部総務課 法規担当(平成 17 年 3 月まで) 平成 17 年文部科学省研究振興局学術研究助成課研修生(平成 18 年 3 月まで) 平成 18 年高知大学研究協力部地域連携課 知的財産担当(平成 23 年 7 月まで) 平成 23 年高知大学研究協力部研究協力課 科研費担当(平成 24 年 7 月まで) 平成 24 年高知大学法人企画課 教育組織改革(学部改組等)担当(現在に至る)

■プログラム概要

「研究支援」というと、「産学連携・知的財産」や「科研費」のように、「専門的」「複雑」との理由で敬遠されがちな分野です。しかし、大学は教育機関であると同時に「研究機関」であり、教員は「研究者」の側面も併せもっています。また、大学における研究費の多くは「競争的資金」であり、学生の「研究成果」である学位論文など、「研究系」以外の職員も様々な場面で「研究」に関わるようになります。加えて、近年の科学技術政策を見ると、研究機関が「研究者を研究に専念させることができる体制」を構築するための施策が展開され、そこでは職員が果すべき役割も大きくなってきています。

そこで、本プログラムでは、先ず第2期科学技術基本計画(H13)以降の科学技術政策を概観します。その上で、ケースを用いて「競争的資金」などの基礎的な知識・制度に触れながら、グループワークを通して「研究機関(大学)における職員の役割」を考えます。

■主な受講対象

研究系(研究協力・産学連携・知的財産など)業務未経験者又は経験1年未満の者

■本プログラムの到達目標

1. 第2期科学技術基本計画(平成13年制定)以降の科学技術政策の概要を説明できる
2. 研究機関(大学)における職員の役割について説明できる

■日時・会場・受講定員

日 時 : 平成26年8月27日(水)10:00~12:00
会 場 : 高知大学 朝倉キャンパス 共通教育1号館 141番教室
定 員 : 28名

大学版反転授業:TBL の手法 ―問題を作ってみよう―

■講師



立川 明(高知大学・総合教育センター・大学教育創造部門・准教授)
高知大学理学部から教育センターに移籍後、大学教育へのアクティブ・ラーニングの導入実践と効果検証を行っている。その成果はTipsにまとめている。また、学内、SPOD内、SPOD外での教員研修にも活かしている。



高畑 貴志(高知学園短期大学・生活科学学科・講師)
担当する情報関連の科目の中にTBLを取り入れて、授業の活性化、学習効果の改善を図っている。また、eラーニングシステムのMoodleを用いてTBLが実施できるよう、システムの拡張を実装した。



濱田 美晴(高知学園短期大学・幼児保育学科・助教)
TBLの仕組みをMoodleで構築し、短期大学の情報及び教職科目の授業に導入している。その教育効果やシステムの概要について、論文や研究会等にて発表を行っている。また、教員対象の学内FD講習会においてTBL講座の講師を務めた。



三島 弘幸(高知学園短期大学・医療衛生学科・教授)
歯学博士。研究テーマ:歯学分野 解剖学、特に口腔領域の硬組織の形態学的・分析学研究。教育研究:TBLに関する研究。

■プログラム概要

- ・TBL 等のアクティブ・ラーニングを導入する授業で、初回に行うべき事(ワークショップ)
- ・個別準備確認試験(ワークショップ)
- ・グループ準備確認試験(ワークショップ)
- ～休憩～
- ・問題作成(ワークショップ)
- ・なぜ TBL の教育効果は高いのか(レクチャー)
- ・ふりかえり

■主な受講対象

アクティブ・ラーニングを導入したい教員、TBL の問題を作成したい教員、反転授業を導入したい教員、学生の成績を上げたい教員

■本プログラムの到達目標

1. TBL の手順が説明できる
2. TBL の問題を作ることができる
3. TBL の効果を説明できる

■日時・会場・受講定員

日 時 : 平成26年8月27日(水) 10:00~15:00
会 場 : 高知大学 朝倉キャンパス 共通教育3号館 311番教室
定 員 : 40名

若手職員に贈る「仕事の魅力発見!!」講座

—気づきから築くアクションプラン—

■講師



愛媛大学総務部学長秘書室

愛媛大学監査室

香川大学教育・学生支援室就職支援グループ

高知大学財務部施設企画課総務係

高知工科大学総務部総務企画課

高知工科大学入試・広報部

徳島大学病院総務課広報・企画部門

四国大学入試広報部入試広報課

聖カタリナ大学総務課

松山大学学生部学生課

チームリーダー

チームリーダー

チーフ

主任

主任

主任

主任

主任

係長

課長補佐

課員

大本 盛嗣

徳増 耕平

古島 愛

毛利 敬太

森 晃彦

鳥田 くみこ

西野 陽子

平田 晋也

和田 真佐子

一柳 慎太郎

■プログラム概要

若手職員のみなさん、日々行っている自分の業務が「大学」という組織の中でなぜ必要で、どのような役割を果たしているのか、意識したことはありますか？「必要なことだろうからやっているんだけど・・・」と、何となく上司や先輩から言われたことを行うだけの業務として処理していませんか？

このプログラムでは、大学職員としての仕事への向き合い方や目指したい姿を考えながら、自分が描くキャリアビジョンを実現するための明日からのアクションプランを作成していきます。そのために、改めて自分の業務を大学の理念や目標と照らし合わせることを通して、何となく与えられた『業務』をこなしているだけの自分から、主体的に意志を持って『仕事』をする自分、『仕事』を楽しみ成長していく自分を築いてもらうためのアシストをします。

講師は、SPOD 次世代リーダー養成ゼミナールを受講している第4期生10名が務めます。

なお、本研修には自大学の紹介冊子（概要など）が必要になります。各自1冊持参してください。

■主な受講対象

採用3年目以上で、30歳未満の若手職員

■本プログラムの到達目標

1. 自大学の理念と自分の仕事とのつながりを説明できる
2. 自分の「仕事」の魅力を発見することができる
3. 自大学の理念・目標を踏まえた上で、自分が描くキャリアビジョンを実現するための明日からのアクションプラン(※)を立てることができる

(※)アクションプラン：自らの意志のもと、目標達成までのプロセスを明確にするもの

■日時・会場・受講定員

日時：平成26年8月27日(水)13:00～17:30

会場：高知大学 朝倉キャンパス 共通教育1号館 141番教室

定員：32名

振り返りを活用した

学生・教職員のための効果的な能力開発手法

■講師



秦 敬治(愛媛大学 教育・学生支援機構教育企画室副室長・教授)
西南学院大学商学部経営学科卒業。九州大学大学院人間環境学研究所専攻・社会システム専攻修士課程修了。同専攻博士課程単位修得満期退学(教育学博士)。学校法人西南学院本部・大学経理課係長(主査)、愛媛大学経営情報分析室助教授、教育企画室准教授を経て現職。愛媛大学教職員能力開発拠点SDC/SPOD-SDC。



山中 亮(愛媛大学 教育・学生支援機構 教育企画室 特任助教)
東京学芸大学教育学部卒業。愛媛大学大学院教育学研究科修了。広島大学大学院教育学研究科文化教育開発専攻 博士課程後期在学中。1992年愛媛県より公立学校教員、2004年よりサッカーコーチ(サンフレッチェ広島・愛媛FC)を経て、2013年10月より愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室・特任助教。大学間連携共同教育推進事業「西日本から世界に翔たく異文化交流型リーダーシップ・プログラム」(UNGL)に従事し、学生のリーダーシップ養成に従事。専門は、スポーツ心理学、コーチング



林 真輝(愛媛大学 教育学生支援部 教育企画課 能力開発室 特定職員)
人間総合科学大学人間科学部卒業。2009年12月より松山東雲女子大学・短期大学職員を経て、2013年1月より愛媛大学教育企画課能力開発室・特定職員。大学間連携共同教育推進事業「西日本から世界に翔たく異文化交流型リーダーシップ・プログラム」(UNGL)に従事し、学生のリーダーシップ養成とリーダーシップ・プログラム運営の事務処理に従事。

■プログラム概要

皆さんは日頃から学生や教職員の能力開発に苦労されていると思います。本プログラムでは、効果的な振り返り手法を使って、学生、学生リーダー、教員、職員の能力開発手法を修得することを目的としています。

特に、成長のプロセスを一つのドラマと考え、そのドラマを如何に構成し、制作していくのかといったストーリーの重要性や、観察に必要なBe Alert(研ぎ澄まされた感性)と、お互いの成長を願うためのCritical Friend(批評し合える仲間)が求められます。

また、学生～学生スタッフ～教職員の3者が共に成長するための仕組みづくりも重要となります。この仕組みがサイクル化することで、持続的な成長をし続ける組織を構築できるのですが、当日は、講義とグループワークを織り交ぜ、上記の秘訣を皆さんと共有しながら進めていきます。

■主な受講対象

大学関係者、教育関連の方々ならどなたでも歓迎いたします

■本プログラムの到達目標

1. 成長のプロセスをドラマ化する重要性を説明できる
2. Be Alert(研ぎ澄まされた感性)やCritical Friend(批評し合える仲間)の重要性を説明できる
3. 持続的な成長環境の重要性を説明できる
4. 1～3を活用した能力開発プログラムの構築ができる

■日時・会場・受講定員

日 時 : 平成26年8月27日(水)13:00～17:30
会 場 : 高知大学 朝倉キャンパス 共通教育3号館 310番教室
定 員 : 48名

データに基づく教育改善の視点と方法 — 教学 IR 入門 —

■講師



山田 剛史

(愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室 副室長・准教授)
2006年8月に島根大学教育開発センター講師・実施部門長となり、准教授・副センター長、2011年より愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室准教授、教育調査・分析部門長を経て、2013年4月より現職。著書に、『大学のIR Q&A』(共著)、『学生と楽しむ大学教育:大学の学びを本物にするFDを求めて』(共著)、『新・青年心理学ハンドブック』(共著)、『生成する大学教育学』(共著)などがある。



清水 栄子(愛媛大学・教育・学生支援機構教育企画室・助教)

安田女子大学文学部英語英米文学科卒業。桜美林大学国際学研究科大学アドミニストレーション専攻修士課程修了。広島大学教育研究科人間科学専攻博士課程修了(博士(教育学))。学校法人安田学園安田女子大学企画室、庶務課、教務課、学生課、公立大学協会事務局主幹、国立高等専門学校法人阿南工業高等専門学校FD高度化推進室特命講師を経て、2013年4月より現職。愛媛大学教職員能力開発拠点SDC。

■プログラム概要

IR(インスティテューショナル・リサーチ)は、学内外の多様なデータを用いて計画立案、政策形成、意思決定を支援するための情報を提供する活動です。情報を提供するという行為は、単にデータを提供するのは異なります。大学にはさまざまなデータがありますが、多くのデータはある事実を表した無機質なものにすぎません。データから意味のある情報へと変換することが、IRの業務の本質であり醍醐味と言えます。

データを意味のある情報に変換するには、そのデータがどのような意味を持っているのか、他のデータとどのような関係があるのかなど、問題意識を持って仮説を立てたり解釈したりすることが必要です。また、データを加工して意味のある情報に変換するためには、各種分析手法も重要になります。

本ワークショップでは、IRの実践のための指針、IRの標準的なプロセスや具体的手法、IRの実践事例を通して、実際の教育改善の場面で活用できるIRの基本的な知識と技能を身につけることを目指します。

■主な受講対象

IRの実践に関心のある教員・職員

■本プログラムの到達目標

1. どのような指針にそってIRの実践を進めたらよいかを自分の言葉で説明できる
2. IRの実践の標準的なプロセスと課題を自分の言葉で説明できる
3. IRの知識と技能を教育改善の具体的事例に応用することができる
4. IRに関する多様な考え方や経験を尊重し、参加者間で共に学びあう雰囲気貢献することができる
5. ワークショップ終了後も自ら学べるように、自身の課題と学習の情報源を把握できる

■日時・会場・受講定員

日時：平成26年8月27日(水)13:00~17:30
会場：高知大学 朝倉キャンパス 共通教育3号館 335番教室
定員：40名

FD

プログラム番号 2703A

教えずに学ばせる授業 ―自律学習プログラム入門―

■講師



坂田 浩
(徳島大学国際センター准教授)

福岡教育大学卒。
「英語学習をしない英語の授業」を実践して5年が経ちました。少しでも学生が英語学習に取り組んでもらうように、そして徳島大学の英語教育をより良いものとしていくように頑張っています！

■プログラム概要

英語教員が学生から打ち明けられる悩みの中でも、「英語の勉強をしようと思っているんですが、なかなか続かなくて…」、「英語の勉強をやり始めたんですが、良い勉強方法が見つからなくて困っているんです…」といった学習方略に関する悩みは、よく耳にするものではないかと思います。今回紹介する「Learning How to Learn」は、そのような悩みを持つ学生の継続的で自律的な英語学習を支援するために作られたワークシートで、授業中の学習支援だけでなく、授業外での学習カウンセリングなどでも広く応用できる可能性を十分に秘めていると考えています。

本ワークシートは、ビジネスや人材育成の場面で用いられているセルフ・コーチングという考えを基に、(1)将来のビジョンを作る、(2)学習目標を設定する、(3)学習計画を策定する、(4)学習を実践する、(5)評価・修正を行う、(6)学習を習慣化する、という6つの項目を基に構成されています。実際のワークシートでは、上記の1～5項目に対応するワークが準備されており、例えば「将来のビジョンを作る」という項目に対しては「Future My Scope」を、「学習目標を設定する」に対しては「Can-do List」を、「学習計画を策定する」に対しては「3つの学習モジュール」というようなワークを準備しており、学習者が教員の支援の下、同じ学習目標を共有するクラスメートの意見も参考にしながら、効率的に自律学習を計画・実践できるように設計しています。

以上のように、今回は、上記「Learning How to Learn」の概要を中心に授業実践を紹介するものですが、全体のシラバスや実践上の工夫などについても紹介したいと考えています。本授業実践の効果については現在調査中ということもあり、具体的なものを提示するのは難しいかもしれませんが、学生からのフィードバックなどを基に、5年間にわたる本授業実践を通して見えてきたものについて報告するようにしたいと考えています。

■主な受講対象

自律学習について考えてみたい方、英語学習を始めてみたいと考えている方なら誰でもお越しください。

※SPODフォーラム2013の本プログラムを受講された方のご参加はご遠慮ください。

■本プログラムの到達目標

1. 自律学習支援と強制のバランスについて述べることができる
2. 「学習」に対する固定概念を再考することができる

■日時・会場・受講定員

日 時 : 平成26年8月27日(水) 15:30～17:30
会 場 : 高知大学 朝倉キャンパス 共通教育1号館 125番教室
定 員 : 60名

職員向けマネジメントセミナー

—もし、あなたの大学にドラッカーがいたら—

■講師



秦 敬治

(愛媛大学 教育・学生支援機構教育企画室 副室長・教授)

西南学院大学商学部経営学科卒業。九州大学大学院人間環境学研究所発達・社会システム専攻修士課程修了。同専攻博士課程単位修得満期退学(教育学博士)。学校法人西南学院本部・大学経理課係長(主査)、愛媛大学経営情報分析室助教授、教育企画室准教授を経て現職。愛媛大学教職員能力開発拠点SDC/SPOD-SDC。

■プログラム概要

マネジメントは、一般的に管理と訳されますが、組織の目的を達成するために必要となるあらゆる要素を組み合わせて効果的に機能させることです。ドラッカーは、マネジメントには基本とすべきもの、原則とすべきものがあると説明しています。大学職員にとってのマネジメントとはどのようなのでしょうか？ 職員は所属大学の理念、ビジョンの達成のためにマネジメントを担っており、必ずしも管理職のみに求められているものではありません。

本セミナーでは、ドラッカーのマネジメント理論に関するレクチャーを行います。さらに、ワークを通じて、参加者自身の所属大学の担っている役割を再確認し、それに準じて自身や仲間の強みを大学運営に活かすマネジメント理論を修得します。

■主な受講対象

事務職員であればどなたでも OK です

■本プログラムの到達目標

1. 大学の理念・ビジョンに基づいてマネジメントすることの重要性を説明できる
2. 所属大学の担っている役割を再認識することができる
3. 仲間や自らの強みを活かす大学マネジメント理論を説明することができる

■日時・会場・受講定員

日 時 : 平成26年8月28日(木) 10:00~12:00

会 場 : 高知大学 朝倉キャンパス 共通教育1号館 125番教室

定 員 : 60名

SD

プログラム番号 2801B

インストラクショナル・デザイン(ID／教育設計)を 活用した職員による企画・立案マネジメント

■講師



仲道 雅輝

(愛媛大学 総合情報メディアセンター教育デザイン室長兼教育・学生支援機構 教育企画室・講師)

1995 年日本福祉大学社会福祉学部卒業。2009 年熊本大学社会文化科学研究科教授システム学専攻博士前期課程修了(専門:教授システム学)。1995 年より日本福祉大学事務職員、2011 年から愛媛大学にて FD・SD や学生能力開発、授業改善・授業コンサルテーションなどの支援に取り組む。主な研究課題は、インストラクショナル・デザインを活用した教育改革に関する研究。eLC 認定 e-Learning Professional。愛媛大学教職員能力開発拠点 SDC。

■プログラム概要

本プログラムでは、問題解決手法であるインストラクショナル・デザイン(ID／教育設計)を理解し、その後、ワークショップ形式にて、自身の業務実践の場に活かせる業務の効率化や課題解決に向けた方策が見出せるようになることを目指します。まず、自身の大学で業務や教育の改善・改革を推進したいと考えている事柄を取り上げるところからはじめ、一般的に改革を推進する上で、ポイントとなる現状分析を丁寧に行います。次に、目標とのギャップを明確に認識し、ゴールに向けて方略・戦略をデザインするための方法論を学び、改革の一端を担う際の効果的な思考を身につけます。

■主な受講対象

大学職員(若手・中堅)の方

■本プログラムの到達目標

1. インストラクショナル・デザイン(ID／教育設計)が課題解決の方法論であることを説明できる
2. 企画・立案にあたって、現状と到達目標とのギャップを明確化することの重要性が説明できる
3. 課題抽出のワークを通じて、自らの実践上の課題を明確にし、その内容を説明できる

■日時・会場・受講定員

日時 : 平成26年8月28日(木)10:00~12:00

会場 : 高知大学 朝倉キャンパス 共通教育1号館 136番教室

定員 : 32名

FD

プログラム番号 2801C

ルーブリック評価入門 ー考える、つくる、活用するー

■講師



俣野 秀典

(高知大学 総合教育センター 大学教育創造部門 講師)

北陸先端科学技術大学院大学知識科学研究科修了。地域科学研究会・高等教育情報センター研究員を経て、2009年より現職。成績評価をはじめとした教育評価を中心に、FDを含めた“Educational Development”に取り組む。学内外で担当するセミナーでは、「参加したセミナーの中で最も目標達成を意識することができた」「理論的観点から振り返ることができた」「これまでの悩みが一気に解決できた」など、参加者から高評価を受けている。

■プログラム概要

成績評価について、多様な評価基準を設定することが求められています。ある大学の『シラバス入力手順説明書』では、“具体的な評価基準はルーブリック評価シートを事前に配布し、配点30点とする”との例が示されたりしており、「ルーブリックって何??」と戸惑われた教員の方も多いと聞いております。

そこで本プログラムは、成績評価の目的・意義から出発して、高等教育において近年注目が集まっているルーブリック評価についての基本的な考え方を理解することを目的として実施されます。

※ルーブリックとは、「目標に準拠した評価」のための「基準」つくりの方法論であり、評価指標として活用されます。本プログラムでは、学生が何を学習するのかを示す評価規準と学生が学習到達しているレベルを示す具体的な評価基準を示すマトリクスからなる分析的ルーブリックを主に取り上げます。

■主な受講対象

目標に準拠した評価方法を習得したい教員

■本プログラムの到達目標

1. 目標に準拠した評価を心がけることができる
2. ルーブリック評価の意義を説明できる
3. ルーブリックを授業で活用するための準備ができる

■日時・会場・受講定員

日時：平成26年8月28日(木)10:00～12:00

会場：高知大学 朝倉キャンパス 共通教育1号館 141番教室

定員：40名

絶対に達成する技術 ー成長する人の内省とはー

■講師



永谷 研一

(発明家・株式会社ネットマン 代表取締役社長・NPO 法人 人材育成マネジメント研究会 理事長・佐賀県武雄市 ICT 利活用教育推進アドバイザー)

1966年静岡県生まれ。人材育成系ITシステムで日米で特許取得し、米国 O-1 ビザ(卓越能力保持者ビザ)取得。心理学や行動科学の知見をベースに日立グループ、三菱東京 UFJ 銀行、楽天といった企業での人材育成で「目標達成」のための行動習慣化プログラムを実践する。明治大学、東海大学や県立高校、公立中学校などの学校でキャリア研修の講師も務める。佐賀県武雄市の ICT 教育アドバイザーとして公立小学校でのタブレット活用授業も手がける。著書に「絶対に達成する技術」(KADOKAWA)がある。

■プログラム概要

目標を達成するための技術「PDCFA サイクル」

大手銀行やメーカーなどの研修の後の行動を IT システムを使ってモニタリング。12000 人の行動実践データを分析して分かったことは、目標達成する人には「共通にやっている技術」があるということです。その技術を「PDCFA サイクル」として体系化しました。本プログラムでは、目標を達成する技術として5つの技術を紹介します。

- P: 目標を立てる技術
- D: 行動を続ける技術
- C: 行動を振り返る技術
- F: 人から吸収する技術
- A: 行動を変える技術

東北大学では留学前の授業にこの技術習得を採用しました。その理由は、単に留学しただけでは成長できないからです。PDCFA サイクルは「自ら考えて行動し続ける力」を養成します。

本プログラムでは、スマートフォンとの連携を睨んだ「人の成長3つの視点」も紹介します。

■主な受講対象

教員、職員

■本プログラムの到達目標

1. 目標を達成するための技術「PDCFA サイクル」を説明できる
2. 正しい行動目標と行動習慣を計画することができるようになる
3. 正しい内省とフィードバックができるようになる

■日時・会場・受講定員

日 時 : 平成26年8月28日(木) 10:00~12:00

会 場 : 高知大学 朝倉キャンパス 共通教育3号館 310番教室

定 員 : 48名

FD

プログラム番号 2801E

大人数講義法の基本

■講師



小林 直人

(愛媛大学 教育・学生支援機構 教育企画室長、愛媛大学 医学部 総合医学教育センター長・教授)

昭和63年3月東京大学医学部医学科卒、平成7年東京大学にて博士(医学)の学位取得。平成17年度より愛媛大学医学部教授、平成21年度より愛媛大学教育・学生支援機構副機構長と教育企画室長を兼任。教育担当理事(教育・学生支援機構長)のもと、大学全体のFDをミクロ・レベルからマクロ・レベルまで幅広く担当。

■プログラム概要

「よい」講義とはここでは、聞き手の学生にとって分かりやすく、知的な緊張感があり、さらに学生が参加する(した気にさせる)講義、ということにします。大人数での講義にはデメリットも多いのが事実ですが、現在の高等教育の実情を考えればこのような授業形態を避けることも不可能です。大講義室でも学生とコミュニケーションを取る方法、学生を積極的に講義に参加させる方法や授業効果を高める方法など、大人数の学生を聴衆とした「よい」講義をするために気をつけておかなければならない様々な授業スキルを、実例や実習を通して習得することができます。

また昨今の高等教育に強く求められている参加体験型授業/アクティブ・ラーニング型授業の一例として、受講者に実際にグループワークを体験していただきます。講義を受け持つようになって間もない教員の方はもちろん、自分の講義を振り返りたいと思われる方、また職員の方々も是非受講してください。

この研修では、参加者の皆さんが日頃実践している工夫も披露して頂きます。ご自分の経験(失敗談も歓迎です!)や他で見聞きした実践例を共有しましょう。きっと、明日の授業に役立つヒントが見つかります。

■主な受講対象

教職員。特に、まだ講義経験がないか数年未満の講義経験しかない教員の方を歓迎します。また、特に学務系の職員の方にとっては、大学の講義に今求められていることについて考えるよい機会になると思います。

■本プログラムの到達目標

1. 学生にとってよい授業とはどのようなものかを具体的に説明できる
2. 自分の経験に基づいて、大人数講義のメリットとデメリットを列挙することができる
3. 「学生中心の大学」の実現のためによい授業ができるようになる
4. 大講義室ならではの様々な授業スキルを、実際の体験を通して習得し自分の授業に生かすことができる

■日時・会場・受講定員

日 時 : 平成26年8月28日(木)10:00~12:00

会 場 : 高知大学 朝倉キャンパス 共通教育3号館 311番教室

定 員 : 56名

理工系の講義形式授業の中で学生を輝かせるひと工夫

■講師



榊原 暢久(芝浦工業大学 教育イノベーション推進センター／工学部 教授)
北海道教育大学(札幌校)小学校教員養成課程卒業。北海道大学大学院理学研究科数学専攻博士課程単位取得退学。博士(理学)。旭川工業高等専門学校助手・助教授、茨城大学工学部講師を経て、2007年度より芝浦工業大学工学部准教授。2009年4月より現職。ファカルティ・ディベロッパー。日本高等教育開発協会、大学教育学会、日本数学教育学会等所属。専門は高等教育開発(特に、理工系数学基礎教育や教員支援(FD)プログラム)。



吉田 博(徳島大学 総合教育センター 講師)
愛媛大学理学部数理科学科卒業。同大学院理工学研究科数理科学専攻博士前期課程修了。2009年度から徳島大学で全学FDプログラムの企画・運営に携わる。また、四国地区大学教職員能力開発ネットワーク(SPOD)のFD担当として、SPOD-FDプログラムの企画立案、調査研究に携わる。

■プログラム概要

理工系の専門的知識の習得や研究を行っていく上で基盤となるのは、各学科の必須科目等で学ぶ基礎知識です。基礎知識を習得するための基礎科目の授業は、大人数、講義形式によって行われることが多くあります。本プログラムでは、このような理工系基礎科目における講義形式授業の中で、学生の主体的な学びや授業外学習を促進することに繋がるひと工夫を取り扱います。

はじめに、授業で学生に達成してほしい到達目標を設定し、その目標到達を測定する評価方法について考えます。続いて、具体的な授業の方法や課題について考えていきます。プログラムは講義と参加者同士のワークを行いながら進めていきます。参加者のみなさんがアイデアを持ち寄ることで、自身の授業における課題解決のヒントや、今後の新しい実践のヒントが見つかることを期待しています。なお、本プログラムは、2013年度の同プログラムを大幅にブラッシュアップさせ、内容を変更しています。

■主な受講対象

- ・自身の理工系の講義形式授業の中で実施できる、広い意味でのアクティブラーニングの手法を知りたい教員
- ・自身の理工系の講義形式授業の中で行っているアクティブラーニングの取り組みを他の教員と共有し、改善のヒントを得たい教員
- ・自身の理工系の講義形式授業を振り返り、基礎的な再構成の方法を知りたい教員

■本プログラムの到達目標

1. 理工系基礎科目における講義形式授業の基礎的なデザイン方法を修得することができる
2. 理工系基礎科目における自身の講義形式授業をふり返ることができる
3. 理工系基礎科目における講義形式授業の取り組みについて他者と話し合うことで、自身の授業における課題解決のヒントを得ることができる

■日時・会場・受講定員

日 時 : 平成26年8月28日(木)10:00~12:00
会 場 : 高知大学 朝倉キャンパス 共通教育3号館 335番教室
定 員 : 30名

リーダーセミナーⅠ

「主体的な学び」を促進するカリキュラム・デザイン

■講師



佐藤 浩章

(大阪大学全学教育推進機構准教授／教育学習支援センター副センター長)

北海道大学教育学部卒、北海道大学大学院教育学研究科修士課程修了、同博士課程単位修得退学。2002年より愛媛大学大学教育総合センター講師。同教育・学生支援機構教育企画室准教授／副室長、キングス・カレッジ・ロンドン客員研究フェロー等を経て、2013年より現職。

■プログラム概要

日本の大学においては昨今「主体的な学修を促す学士課程教育」への転換が求められています。これは、主体的な学修については、個々の教員の授業レベルにおいて論じるには限界があり、カリキュラムレベルで論じる必要があることを意味しています。

本セミナーでは、日本高等教育開発とベネッセ教育総合研究所が、全国の国公私立大学2,376学科の学科長を対象にして行った、カリキュラムの実態に関する調査の結果を踏まえて、「主体的な学び」を促すカリキュラムの内容、変革プロセス、その課題について学びます。

とりわけ高い関心を集めている、カリキュラムのデザイン方法(どのような内容の科目をどのような順番で並べるのか)について焦点をあてます。

本セミナーでは、レクチャーだけではなく、個人によるチェックシートを使ったワーク、ならびにペア・グループワークを適宜取り入れて、他大学の事例との比較の中で、自大学のカリキュラムの課題を発見し、解決方法を見いだせるようにします。

参考：日本高等教育開発協会・ベネッセ教育総合研究所『大学生の主体的な学習を促すカリキュラムに関する調査報告書(アンケート調査編)』(2013)、『同(ケーススタディ編)』(2014)、ベネッセ教育総合研究所。(事前にお読みいただければ、理解が円滑になります。いずれもベネッセ教育総合研究所のウェブサイトからダウンロードいただけます。)

■主な受講対象

カリキュラム改善に関心のある教職員。特に、管理職、教務委員、FD委員、教務系職員

■本プログラムの到達目標

1. カリキュラム・デザインに関する基本用語(バックワードデザイン、スコープ、シーケンス)について説明できる
2. カリキュラム改革の優良事例を通して、自らの組織のカリキュラムの課題について発見できる

■日時・会場・受講定員

日時：平成26年8月28日(木)13:00～15:00

会場：高知大学 朝倉キャンパス 共通教育1号館 125番教室

定員：80名

国際連携系職員養成プログラム(レベルⅡ) 留学生受入実践

■講師



Ruth Vergin

(愛媛大学 国際連携推進機構 国際教育支援センター 教授)
University of Puget Sound, Tacoma, Washington, USA 卒業。1996年より愛媛大学農学部留学生担当講師となる。2002年に愛媛大学留学生センターに異動し、全学の留学生生活支援を担当すると同時に、日本人学生の海外派遣プログラムの開発・支援にも携わる。専門は異文化コミュニケーション。



高橋志野

(愛媛大学 国際連携推進機構 国際教育支援センター 准教授)
Asian Studies, University of British Columbia, Canada の M.A. 修了。2002年より愛媛大学留学生センターで、留学生への日本語教育、日本語教員養成教育に取り組むと同時に、留学生日本語ボランティア J-support システムの運営に携わる。専門は言語学・外国人に対する日本語教育。

■プログラム概要

外国人留学生にとって「安心できる魅力のある受入体制」とは、どのようなものでしょうか。各教育機関で実施してきた「過去の留学生数に基づいた」取り組みは、最近の外国人留学生受入数の増加・多様化に伴い限界に近づいてきており、多くの機関で新たな受入体制の構築が求められているのではないのでしょうか。

本プログラムでは、大学教職員が連携して運営している受入体制の一事例として、愛媛大学の事例を紹介しつつ、留学生受入の際の必須項目そして現状と課題を確認していきます。特に、地域リソースの活用方法・ネットワーク形成については、参加者全員で自分達の実践事例(失敗談や現在進行中の事例も大歓迎です)を積極的に共有することで、それぞれの教育機関で効率的で有効な「大学教職員が一体となった受入体制構築」が可能になることを期待しています。

■主な受講対象

学内の国際交流に関わる立場、または国際交流に関わる業務に関心のある教職員

■本プログラムの到達目標

1. 留学生入学ガイダンスを設計し、実施することができる
2. 留学生に問題が生じた場合、必要に応じて専門家へ紹介することができる
3. 地域や行政等関係諸機関との連携を構築することができる

■日時・会場・受講定員

日 時 : 平成26年8月28日(木)13:00~17:30
会 場 : 高知大学 朝倉キャンパス 共通教育1号館 136番教室
定 員 : 32名

いろいろ・eラーニング・ワークショップ

■講師



竹岡 篤永

(高知大学 総合教育センター特任助教(大学連携 e-Learning 教育支援センター四国分室担当))

北陸先端科学技術大学院大学において、人同士がわかり合う過程(基盤化)の機能面の研究にて学位を取得後、ユーザーの視点をデザインに取り入れるインクルーシブデザインプロセスの研究などに携わる。その後、eラーニングによってeラーニングの専門家を養成する熊本大学大学院で学び、eラーニングの学習者支援やストーリー中心型カリキュラム(および、その研究)を推進中。

■プログラム概要

「eラーニングとは対面講義を撮影して配信(同期・非同期を問わず)するものだ」あるいは、「eラーニングではアクティブラーニング(ここでは学生の能動的な学修とする)のようなことはできない」などと漠然と考えていませんか。eラーニングは対面講義や少人数ゼミナールと同じように、学修の一つの方法です。本ワークショップでは、自らのeラーニングによる教育実践(あるいは、教育実践や教育支援実践でも可)を振り返るためのゲームを通じて、教員(教職員)の学生への関わりを見つめ直します(ゲームは、デザイナーがユーザーと関わりながらデザインを行うインクルーシブデザインの研究を応用して考案しました)。参加者は、自らの教育実践が、教員・学生の関わりにおいてどのように位置づけられるかを考え、さらにそれを踏まえ、学生が能動的になれるeラーニングのアイデアを、ゲームを通じて競い合いながら学びます。

■主な受講対象

現在eラーニングの授業を実施している(あるいは実施予定の)教員、または、eラーニングという授業形態に興味・関心を持っている教職員で、eラーニングに学生の能動的な関わりを取り入れたい人

■本プログラムの到達目標

1. 自らのeラーニングによる教育実践を学生の能動的な関わりという観点から振り返ることができる
2. eラーニングにおける学生の自律的な学習方略についてのアイデアを説明することができる

■日時・会場・受講定員

日 時 : 平成26年8月28日(木) 13:00~15:00
会 場 : 高知大学 朝倉キャンパス 共通教育1号館 141番教室
定 員 : 40名

部下・若手職員の育成 ー自ら学び成長するー

■講師



米澤 慎二

(追手門学院大学教務部事務部長 兼 国際交流教育センター事務部長)

高等学校卒業後、香川医科大学、東京医科歯科大学、愛媛大学等で勤務し、主に人事系を中心に業務を行ってきた。2014年4月から追手門学院大学で勤務しているが、愛媛大学教職員能力開発拠点SDC/SPOD-SDCとしても活動している。

■プログラム概要

SPOD では SD の講師養成プログラムや SDC 養成講座を実施している。これは、職員自らが「学び、実践し、教える」といった段階的な成長が可能となる SD プログラムである。

一般的にSDにとって最も大切だと言われているのは自己啓発である。本プログラムでは、自己啓発を促す、実践力を重視した SD 講師養成手法を学び、それを若手職員の育成に活かす手法を学ぶ。

■主な受講対象

係長以上の職員で若手職員を育てようと考えている方

■本プログラムの到達目標

1. 人材育成の3原則を説明することができる
2. SD 講師養成プログラムの内容を説明することができる
3. SDC 養成講座の内容を説明することができる
4. 教えることが自己の成長につながることを説明することができる

■日時・会場・受講定員

日 時 : 平成26年8月28日(木)13:00~15:00

会 場 : 高知大学 朝倉キャンパス 共通教育3号館 310番教室

定 員 : 32名

学びを促進する学習支援とアカデミック・アドバイジング

■講師



清水 栄子

(愛媛大学・教育・学生支援機構教育企画室・助教)

安田女子大学文学部英語英米文学科卒業。桜美林大学国際学研究科大学アドミニストレーション専攻修士課程修了。広島大学教育研究科人間科学専攻博士課程修了(博士(教育学))。学校法人安田学園安田女子大学企画室、庶務課、教務課、学生課、公立大学協会事務局主幹、国立高等専門学校法人阿南工業高等専門学校 FD 高度化推進室特命講師を経て、2013年4月より現職。愛媛大学教職員能力開発拠点 SDC。

■プログラム概要

学習支援は多岐にわたっており、一言で説明することは難しい面もあります。これを踏まえ、私たち教職員は、学生たちがよりよい学習を行うために様々な支援を試みています。本研修では、まず学習支援について機能面から概説した上で、現在の日本での学習支援の実施状況について参加者の皆さんと考えてみたいと思います。併せて米国の教職員による履修相談であるアカデミック・アドバイジングを介した学習成果に関する取組事例や教職員がどのような役割・機能を担っているのかを紹介します。その後、参加者の所属大学の学生に対する学習支援による具体的な学習成果を挙げ、それを達成するための実践企画・計画を具体的に立てていただきます。自大学の実態に即した具体的提案を考えてみましょう。

■主な受講対象

学習支援に関心のある教職員

■本プログラムの到達目標

1. 学習支援の機能について説明することができる
2. 学習成果を達成するための具体的な学習支援方策を提案することができる
3. 学習支援実践者として必要とされる知識について説明することができる

■日時・会場・受講定員

日 時 : 平成26年8月28日(木)13:00~15:00

会 場 : 高知大学 朝倉キャンパス 共通教育3号館 311番教室

定 員 : 40名

FD・SD

プログラム番号 2802F

ツールを使ってコミュニケーション

—自己理解と他者理解—

■講師



野口 里美
(香川大学教育学部総務係長)

昭和 61 年香川大学採用。総務、会計、学務を一通り経験した後、今年 4 月に現在の部署に配置換え。昨年度まで FD 関係業務を担当し、SPOD 設立当初からネットワークコア校の FD 担当事務として携わっていた。SPOD 研修プログラムでは、「SPOD-SD プログラム開発セミナー」、「ファシリテーター養成講座」、「FDer 養成講座」を受講。また、外部団体主催の「はじめてのワールド・カフェ」、「ワールド・カフェ・ファシリテーター養成コース」等セミナーに参加し、「SPOD フォーラム 2012」で「ワールド・カフェ」の講師を担当。外部団体主催の「SPT アドバイザー養成講座」、「SPT セルフカウンセラー養成講座」を受講し、SPOD フォーラム 2013」でも同プログラムの講師を担当。

■プログラム概要

このプログラムでは、「SP トランプ」というツールを使って、コミュニケーションの方法を考えていきたいと思えます。SP(サブパーソナリティ)トランプとは、人間の持つ様々な面を一つひとつ取り上げ準人格化し、独立させた SP をトランプ形態にしたものです。多くの人にみられる代表的な SP にニックネームをつけてそれぞれのトランプに書いてあります。「自己理解」、「他者理解」、「他者とのコミュニケーション」、「自己成長」の教材として、楽しくそして役立つように開発されたものです。

職場での活用例としては、学生支援のツールとして、学生対象の「自己理解」「自己成長」をテーマとした研修、就職支援や学生相談等に活用できます。また、職場での上司や部下、同僚とのコミュニケーション方法を知る上でも有効です。

本プログラムでは、みなさんに SP トランプとは何か、どのようなことができるのかを知っていただき、実際に体験していただくことで、大学現場でどのように活用することができるかをグループで検討し、全体で共有します。

■主な受講対象

ツールを使ったコミュニケーションに興味のある教職員ならどなたでも

■本プログラムの到達目標

1. SP トランプの特徴と使用方法を説明することができる
2. SP トランプの活用例を説明することができる
3. SP トランプを使ったコミュニケーションを行うことができる
4. SP トランプを使って、自己理解・他者理解を深めることができる

■日時・会場・受講定員

日 時 : 平成26年8月28日(木)13:00~15:00
会 場 : 高知大学 朝倉キャンパス 共通教育3号館 335番教室
定 員 : 28名

リーダーセミナーⅡ

われわれはどのような経営視点を持てばよいのか？

—大学のマネジメントを考える—

■講師



大坪 檀

(学校法人新静岡学園 理事長 静岡産業大学 総合研究所所長)

東京大学経済学部卒。カリフォルニア大学経営学大学院修士課程修了。同大学で MBA 取得後(株)ブリヂストンに入社。宣伝部長、米国ブリヂストン経営責任者を歴任。1987 年より静岡県立大学経営情報学部教授、学部長、学長補佐を務める。1998 年より静岡産業大学国際情報学部教授を経て 2000 年に同大学学長に就任。2012 年 4 月より学校法人新静岡学園理事長。著書『大学のマネジメント・その実践—大学の再生戦略』(2005)など多数。

■プログラム概要

「大学のマネジメント」についての議論が喧しくなって久しくなります。大学のガバナンスを強化するため、トップ・マネジメントの権限を拡大する方向性も明確になってきました。しかしながら、これまでの大学が、マネジメントやガバナンスといったことになじみの薄い組織であったことも事実です。講演では、これからの大学を支えていかれる皆さんに、静岡産業大学での事例をふまえながら、「マネジメントを意識するためにはどのような視点をもてばよいのか」「大学のガバナンスを強化するためには具体的にどのように考えればよいのか」についてお話しします。

- 1 マネジメントの基本 PDCA
目的、目標を達成するために方針・計画→組織→人事→チェック
PDCAの存在 実行化のリーダーシップの存在
- 2 この大学は何のため、だれのために存在するのか
理念とミッション明確化 トップの責任／実行 執行 計画の明示
- 3 大学のステークホルダー 存在の基盤
私学—授業料／国公立—税金
- 4 執行のプロセス 権限と責任
組織の在り方 ガバナンス／監査の役割
- 5 リーダーの役割
知識労働者のマネジメント／感激・感動・共鳴させる目標の設定／ハッピーな組織づくり
- 6 大学マネジメントはユートピア

■主な受講対象

組織のマネジメントに取り組んでいる／取り組もうとしている教職員
大学におけるマネジメント／ガバナンスについて深く学びたいと思っている教職員
マネジメントの必要性は理解しているが、大学でどのように取り組むべきか悩んでいる／迷っている教職員

■本プログラムの到達目標

1. 大学におけるマネジメントの基本を説明できる
2. 大学においてマネジメントが必要とされる背景が説明できる
3. マネジメントの視点からリーダーの役割を説明できる

■日時・会場・受講定員

日 時 : 平成26年8月28日(木) 15:30~17:30
会 場 : 高知大学 朝倉キャンパス 共通教育1号館 125番教室
定 員 : 80名

ジグソー学習法を用いたグループワークの進め方

■講師



村田 晋也
(九州国際大学 経済学部経営学科 助教)

九州大学大学院経済学府博士後期課程満期取得退学。平成22年4月より現職。現本務校において大学広報やFD活動に加え、文部科学省大学間連携共同教育推進事業「西日本から世界に翔たく異文化交流型リーダーシッププログラム」の運営に携わる。専門は、人的資源管理論、リーダーシップ論。

■プログラム概要

社会心理学者 K. レヴィンをはじめとした集団力学を専門とする研究者たちによってこれまで種々実証されてきたように、グループワークは、受講者が学習に対する積極的な姿勢を抱けるよう変化を促すのに有効な手法として注目されてきました。とりわけ同手法は近年、学校教育の場で広く導入されつつあることは周知のとおりです。しかし、一言で「グループワーク」とはいても、その実践方法は玉石混濁であるのが実態です。

そこで本プログラムでは、それら数ある手法のうち、高い効果が得られるとして良く知られているやり方の1つを体験して頂ければと考えております。これは、社会心理学者 E. アロンソンが1978年著書 *The Jigsaw Classroom* (松山安雄訳『ジグソー学級 生徒と教師の心を開く協同学習法の教え方と学び方』)の中で提唱した「ジグソー学習法」なるもので、この学習法を用いた授業の進め方とその効果を皆さまに紹介することを本プログラムの主たる目的としております。

■主な受講対象

今後、グループワーク手法を取り入れた授業を行うことを検討されておられる教職員の皆さまを歓迎致します

■本プログラムの到達目標

1. ジグソー学習法の基本的な仕組みについて説明できる
2. ジグソー学習法を用いたグループワークの進め方を体得し、授業で用いることができるようになる

■日時・会場・受講定員

日 時 : 平成26年8月28日(木) 15:30~17:30
会 場 : 高知大学 朝倉キャンパス 共通教育1号館 141番教室
定 員 : 30名

大学防災マネジメント

—地域とおたがいさまの関係をつくる—

■講師



大槻 知史

(高知大学総合科学系地域協働教育学部門 准教授 立命館大学
歴史都市防災研究所 客員研究員)

1976年京都市生まれ。2004年立命館大学政策科学研究科博士後期課程修了(博士:政策科学)2008年より現職。2012年より高知大学地域支援計画検討WG座長として、大学教職員・学生・地域の協働による大学を核とした地域全体の防災力の向上と避難所運営に備えた事前の仕組みづくりを行っている。

また、大学生による防災授業や防災商品の開発など、防災・震災復興と学生教育の接合による人材育成に取り組んでいる。

■プログラム概要

東日本大震災等の事例を踏まえ、大学キャンパス、大学周辺地区において、大学・学生・地域が現状理解を共有し、負担を分け合いながら「実際に活動する」防災計画を進める必要性について、大学の危機管理、BCP、学生支援の側面から説明する。

あわせて高知大学における「地域支援計画検討WG」の事例をたたき台として、具体的な活動を紹介しながら、防災対策の前提である大学・地域・学生間での「顔の見える関係」のつくり方、学生・地域を巻き込んで大学・地域の防災対策を前に進めるために必要な「場」のデザイン、獲得目標の明確化の必要性、職員・教員間の連携のためのポイント、防災・震災復興を学生の育ちの機会として活用する方法などについて議論を行う。

■主な受講対象

大学事務職員

- 災害が起きた際に、避難所運営に駆り出されることが予想される方
- 大学の危機管理・キャンパス地区の地域対応の担当者
- BCP担当者、施設管理者
- 大学・地域連携の担当者

大学教員

- 防災に関心のある方
- 地域連携に関心のある方

■本プログラムの到達目標

1. 所属大学における、大学教職員・学生・地域の連携による動的な防災対策の必要性に気づくことができる
2. 大学教職員・学生・地域の連携による防災対策の具体的なアイデアをみんなで出し合い、各人が勤務校で実施するためのヒントと動機付けを得ることができる。

■日時・会場・受講定員

日 時 : 平成26年8月28日(木)15:30~17:30

会 場 : 高知大学 朝倉キャンパス 共通教育3号館 310番教室

定 員 : 30名

SD

プログラム番号 2803E

若手・中堅職員のためのコーディネート力養成講座

■講師



仲道 雅輝

(愛媛大学総合情報メディアセンター教育デザイン室長兼教育・学生支援機構教育企画室・講師)

1995 年日本福祉大学社会福祉学部卒業。2009 年熊本大学社会文化科学研究科教授システム学専攻博士前期課程修了(専門:教授システム学)。1995 年より日本福祉大学事務職員、2011 年から愛媛大学にてFD・SD や学生能力開発、授業改善・授業コンサルティングなどの支援に取り組む。主な研究課題は、インストラクショナル・デザインを活用した教育改革に関する研究。eLC 認定 e-Learning Professional。愛媛大学教職員能力開発拠点 SDC。

■プログラム概要

仕事におけるコーディネートとは、何をどのようにすることなのでしょうか。目標達成のために部局や立場を超えて、必要なスキルや能力を備えた人を集めるだけでなく、チームの中で異なる分野(領域)・個々の利害による関係を調整し、全体の合意を形成し、向かうべき目標・ゴールまで着実に誘導していくこと、これが仕事におけるコーディネート力です。職場におけるコーディネーターという役割は、物理的なシステムでは解決できない、人にしか担当できない仕事と言えます。

本ワークショップでは、グループワーク等を通じて、チームの各メンバーが持つアイデアや意見、情報をうまく引き出し、まとめ、一つの目標達成に向かえるようにするまでのコーディネート力の実践とコツについて、学んでいただけたらと思います。

■主な受講対象

大学職員(若手・中堅)

■本プログラムの到達目標

1. コーディネート力を高めていく要素・コツについて説明できる
2. 異なる意見のまとめ方を説明できる
3. コーディネート力の要素を使った行動のうち明日から実践できることを一つあげることができる

■日時・会場・受講定員

日 時 : 平成26年8月28日(木) 15:30~17:30

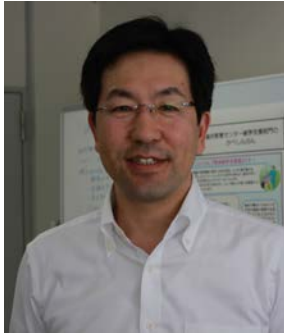
会 場 : 高知大学 朝倉キャンパス 共通教育3号館 311番教室

定 員 : 32名

発達障がいについての基礎知識と

高等教育機関での支援体制について考える

■講師



松本 秀彦

(高知大学・総合教育センター特別修学支援室・特任准教授)

平成8年東京学芸大学大学院障害児教育専攻修了、平成14年北海道大学大学院満期退学。作新学院大学で障害児認知生理心理学担当および宇都宮市スクールカウンセラーを経て2014年度高知大学着任。専門は特別支援教育、発達障がい児者心理学。特別支援教育士スーパーバイザー、学校心理士資格をもつ。

■プログラム概要

友だちとのコミュニケーションが苦手だと感じているためグループワーク形式の授業に出席できない、教員の言葉による指示理解が難しいため実習でのミスが多い、一定の理解力はあるが要約が出来ないため理解度を評価するための授業レポートが出せない、など発達障がいのある学生は修学上の困難を有しています。本プログラムでは、発達障がいについての基礎的な心理・認知特性について学び、彼らがどのように感じているのか、必要なサポートは何かなど、修学上必要な合理的配慮について考えたいと思います。さらに、実際には窓口へ相談があってはじめて支援開始となりますが、学生の支援ニーズの把握や相談につなげる方法、さらに支援を継続するための取り組みについて各大学の現状を共有し、効果的な支援体制のあり方について検討したいと思います。その中で、学部教員が支援の中で果たす役割についても考えたいと思います。

■主な受講対象

障がい学生支援担当の教職員、学生相談担当の教職員

■本プログラムの到達目標

1. 発達障がいの認知・心理機能の特性について理解して、概要を説明できるようになる
2. 発達障がいのある学生が修学場面でどのようなことに困難があるか説明できるようになる
3. 合理的配慮とは何か基本的な事項を説明できる
4. 受講者の所属大学に応じて、学部および教員との連携した修学支援のながれを具体的に想定することができる

■日時・会場・受講定員

日 時 : 平成26年8月28日(木) 15:30~17:30

会 場 : 高知大学 朝倉キャンパス 共通教育3号館 335番教室

定 員 : 30名

FD・SD

プログラム番号 2901A

大学の危機管理 一事例から考えるハラスメント

■講師



阿部 光伸(愛媛大学 教育・学生支援機構 教育企画室 講師)
東北大学大学院教育学研究科修了。専門学校での15年の教員生活を経て、平成15年から東北文化学園大学に勤務(学生課長, 教務部長, 学園事務局部長)。学生課長・教務部長時代に学生・教職員にかかる事件・事故等に対応。平成24年4月から現職。愛媛大学教職員能力開発拠点 SDC/SPOD-SDC。



清水 栄子(愛媛大学 教育・学生支援機構 教育企画室 助教)
安田女子大学文学部英語英米文学科卒業。桜美林大学国際学研究科大学アドミニストレーション専攻修士課程修了。広島大学教育研究科人間科学専攻博士課程修了(博士(教育学))。学校法人安田学園安田女子大学企画室、庶務課、教務課、学生課、公立大学協会事務局主幹、国立高等専門学校法人阿南工業高等専門学校FD高度化推進室特命講師を経て、2013年4月より現職。愛媛大学教職員能力開発拠点 SDC。



吉田 一恵(愛媛大学 教育学生支援部 部長)
愛媛大学法文学部法学科卒業。愛媛大学広報室長、人事課長を経て平成26年4月から現職。広報室・人事課での5年6月の間愛媛大学危機管理室副室長を兼務し、記者会見を所掌、報道対応マニュアル等を作成、人事課では、労務・人権侵害事案にも対応。愛媛大学教職員能力開発拠点 SDC/SPOD-SDCとして引き続き職員の能力開発に取り組んでいる。

■プログラム概要

あなたが、今、何気なく行っているその言動は、ハラスメントではありませんか？

本プログラムでは、大学等において、今、身近にあるハラスメントについて説明すると共に、ハラスメントが起こった時の初期対応、未然に防ぐための気づきについて考えます。特に、複雑かつ多様化するハラスメントについて、具体的事例を挙げながら、「ケースメソッド」により省察し、①ハラスメント認定のポイント、②ハラスメントが起きた場合の対処方法、③ハラスメント「施策」を導き出していきます。

■主な受講対象

全教職員

■本プログラムの到達目標

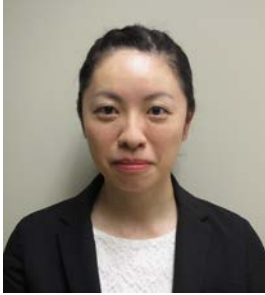
1. ハラスメントについて、説明することができる
2. ハラスメントの事実認定ができる
3. ハラスメントに対処できる
4. ハラスメントの予防対策を構築することができる

■日時・会場・受講定員

日 時 : 平成26年8月29日(金)10:00~12:00
会 場 : 高知大学 朝倉キャンパス 共通教育1号館 125番教室
定 員 : 64名

学生参加型授業入門

■講師



藤本 佳奈
(香川大学 キャリア支援センター・助教)

広島大学教育学部第五類教育学系コース、同大学院教育学研究科教育学専攻博士課程前期、同研究科教育人間科学専攻博士課程後期を経て、平成22年12月より現職。

■プログラム概要

近年、教員が学生集団に一方的に知識を伝達する講義形式の授業から、グループワークやディスカッションなどが導入された学生参加型授業への変革が求められています。参加型授業では、学生は教員の話をつき耳で聞くのではなく、発言したり意見を述べたりと、能動的に授業に関わることが求められています。ですが、実際の学生は授業中に発言することを嫌いますし、意見を交わすことも苦手としています。そのため、教員が無理やり授業を参加型にしようとしても、なかなか上手くいかないことが多いのではないのでしょうか。この講座では、そうした実践上の悩みを取り上げながら、学生が授業に「参加」するためのコツ(やツール)をいくつか紹介したいと思います。実際にグループワークも行ってもらいますので、授業への「参加」を体感的に学んでもらえれば幸いです。

■主な受講対象

教員。特に、講義経験が無いもしくは講義経験の浅い(3年未満)教員の受講を歓迎します。

■本プログラムの到達目標

1. 学生参加型授業が求められる背景を理解し、説明することができる
2. 学生の授業への「参加」とはどのような状態か、説明することができる
3. 学生の授業への「参加」を促すためのコツやツールを理解し、実際の授業に導入することができる

■日時・会場・受講定員

日 時 : 平成26年8月29日(金)10:00~12:00
会 場 : 高知大学 朝倉キャンパス 共通教育1号館 136番教室
定 員 : 30名

プロジェクトマネジメント

■講師



丸山 智子
(愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室特任助教)

東京学芸大学教育学部教員養成課程卒業。Columbia University Teachers College, International Educational Development MA 修了。プロジェクトマネジメントに関する教育、コンサル、プログラム開発を提供する民間企業を経て、2013年10月より愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室・特任助教。専門は、プロジェクトマネジメント、リーダーシップ、高等教育。愛媛大学教職員能力開発拠点 SDC。



仲道 雅輝
(愛媛大学総合情報メディアセンター教育デザイン室長兼教育・学生支援機構教育企画室・講師)

1995年日本福祉大学社会福祉学部卒業。2009年熊本大学社会文化科学研究科教授システム学専攻博士前期課程修了(専門:教授システム学)。1995年より日本福祉大学事務職員、2011年から愛媛大学にてFD・SDや学生能力開発、授業改善・授業コンサルテーションなどの支援に取り組む。主な研究課題は、インストラクショナル・デザインを活用した教育改革に関する研究。eLC 認定 e-Learning Professional。愛媛大学教職員能力開発拠点 SDC。

■プログラム概要

職場における仕事の形態として、定常業務に加え、プロジェクトとしてチームで取り組まなければならない機会が益々増えています。プロジェクトは、携わるメンバーの技量やマネジメント力、人間関係などによって良好になったり低迷したりと、さまざまな要因で変化します。そこで、本セミナーでは、プロジェクトの成功に必要な基本的なプロジェクトマネジメントの知識体系を学ぶとともに、実際に「プロジェクトの立ち上げ」の領域を参加者同士のグループワークによって体験します。また、プロジェクトマネジメントの中でも「人的資源マネジメント」における「人間関係スキル」の重要性を学習します。

さらに、プロジェクトマネジメントは日常業務でも使えるツールであることから、明日からの職場で実際に使えるヒントが得られます！

■主な受講対象

教職員

■本プログラムの到達目標

1. プロジェクトマネジメントとは何かを説明できる
2. プロジェクトマネジメントの考え方やプロセスを説明できる
3. プロジェクトチームマネジメントにおける人間関係スキルの重要性を説明できる

■日時・会場・受講定員

日 時 : 平成26年8月29日(金)10:00~12:00
会 場 : 高知大学 朝倉キャンパス 共通教育1号館 141番教室
定 員 : 32名

FD

プログラム番号 2901D

はじめましょうアクティブラーニング

ー橋本メソッドの事例からー

■講師



金西 計英
(徳島大学 大学開放実践センター・教授)

徳島大学教育学部卒業。鳴門教育大学大学院学校教育研究科修了。2000年、博士(工学)を徳島大学より取得。関西学院大学、金沢工業大学、四国大学を経て、1999年より徳島大学へ。2009年より徳島大学大学開放実践センター教授。大学におけるe-Learningの開発、および運用に取り組む。また、高等教育におけるICT活用の授業開発について、実践という観点から取り組む。

■プログラム概要

アクティブラーニングの効果は広く知られるようになってきました。しかし、アクティブラーニングを実施するのは敷居が高いと感じられます。独りで、授業のフレームワークを開発するのは困難です。そこで、このプログラムはワークショップ形式で、「橋本メソッド」と呼ばれるアクティブラーニングを、実際に体験しながら学んでいきます。一つの枠組みを知ること、自らの授業にあった形へアレンジは容易になると思います。「橋本メソッド」はゲーム性を取り込んだ、大人数向けのアクティブラーニングの形式です。

1. 橋本メソッドの紹介(徳島大学での事例紹介)
2. グループを作ろう
3. グループで作業してみよう
4. グループで発表しよう
5. 作業の振り返り

■主な受講対象

教員(グループワークを授業に取り入れたい方)、および教務系の職員

■本プログラムの到達目標

1. 授業にグループワークを導入する効果を説明できる
2. 授業にグループワークを導入する仕方を説明できる
3. 授業でのグループワーク実施の手順を説明できる

■日時・会場・受講定員

日時 : 平成26年8月29日(金)10:00~12:00
会場 : 高知大学 朝倉キャンパス 共通教育3号館 310番教室
定員 : 40名

地域体験を学びに変える

— “どうしようもない” から気づく力をつける—

■講師



今城 逸雄

(高知大学 リエゾンオフィス「コラボレーション・サポート・パーク」室長、高知大学総合教育センター特任講師)

高知商工会議所で11年間商店街活性化を担当。大学生による街づくりグループ「エスコーターズ」を組織するなど、全国から注目される事業を企画実施。その間、高知大学大学院人文社会科学研究科で学び2003年修了。2010年から高知大学で地域教育フィールドの開発、学生プロジェクト支援、地域体験バスツアー「えんむすび隊」、サービスラーニング授業などを行う。着ぐるみを使ったコミュニケーションや社会とのつながりを考える授業はマスコミで取り上げられ話題を集めている。

■プログラム概要

学外での学習体験は、学内での座学とは違った刺激を学生に与えます。しかしコミュニケーションに自信が持てなかったり、社会の中で行動することが苦手で、体験を十分に生かせない学生がいます。そこで学生が他者との関係から気づき、自らの行動を考え、社会の中で達成感を感じるためのツールとして着ぐるみに着目しました。着ぐるみを使った授業での効果や、コラボレーション・サポート・パークでの地域活動の事例を中心に話したいと思います。

ぜひ着ぐるみ体験をしていただきたいのですが、残暑厳しい頃なので着ぐるみを着てもらうのはさすがに酷だと思しますので、それに代わる体験を考えています。他者との関係からの気づきや、バリアフリーなどの外の世界(地域)にも関心が広がることを期待しています。

5人程度に分かれてのグループワークとなります。グループでの実行→振り返り→改善→再実行→再振り返りのサイクルを経験していただき、気づきを与える授業開発や職場の環境改善のご参考になれば幸いです。

■主な受講対象

教職員。特にサービスラーニングを始めたいと思っている方、学生の積極性を引き出したいと考えている方、職場改善のヒントを探している方には、新しい視点から考える機会になると思います。(ちょっと勇気のある方、人見知りの方も歓迎)

■本プログラムの到達目標

1. 地域とつながる学生プログラムの開発や運営のヒントを得ることができる
2. コミュニケーションについて、改めて考えることができる
3. 社会や職場の改善を考えるきっかけをつかむことができる

■日時・会場・受講定員

日時：平成26年8月29日(金)10:00~12:00

会場：高知大学 朝倉キャンパス 共通教育3号館 311番教室

定員：30名

スタッフ・ポートフォリオ作成ワークショップ

—キャリアを見つめるための自身の可視化法—

■講師



野口 悟

(高知大学 医学部・病院事務部 学生課 総務係 係長)

広島大学大学院理学研究科修了理学修士。平成 15 年高知大学採用、国立室戸青少年自然の家にて3年間出向し、研究支援業務や大学院教務業務等を経て平成 25 年 11 月から現職。平成 23-24 年度 SPOD 次世代リーダー養成研修受講(二期生)、平成 25 年 1 月修了。



浜田 昌代

(高知大学 研究国際部 研究推進課 研究助成係 係長)

平成 6 年高知大学採用、総務、財務を経験。主に、人事部門にて人事管理業務を担当。平成 25 年 8 月から現職。外部資金に係る研究支援業務を担当。平成 24-25 年度 SPOD 次世代リーダー養成研修受講(三期生)、平成 26 年 1 月修了。

■プログラム概要

まず、スタッフ・ポートフォリオ(以下、「SP」という。)って？と思われるかと思いますが。皆目見当がつかない方や、「ティーチング・ポートフォリオは聞いたことあるけど・・・」という方もいると思いますが、本プログラムにおいて、「SP」とは「職員の業績を可視化した書類」を意味します。

本プログラムでは、SP とは何かを具体的に示した後、職員個人としての有用性(職員個人にどのような影響や効果があるか)・組織としての有用性(大学や大学職員人事マネジメントにどのような影響や効果を与えるか)について考察してもらい、SP について理解を深めていきます。また、「メンタリング」の手法を用いて、SP の一部分を実際に作成することを体験します。SP は自身で作成するものですが、随時改定していくことが重要です(この改定作業の際も「メンタリング」が有効的です)。本プログラムを通じて自身を顧みるきっかけにしてみませんか？

■主な受講対象

全職員

■本プログラムの到達目標

1. スタッフ・ポートフォリオとは何かを説明することができる
2. スタッフ・ポートフォリオの有益性を説明することができる
3. メンタリングについて説明することができる
4. スタッフ・ポートフォリオを基にして自身を顧みることができる

■日時・会場・受講定員

日 時 : 平成26年8月29日(金)10:00~12:00

会 場 : 高知大学 朝倉キャンパス 共通教育3号館 335番教室

定 員 : 32名

大学人のためのリフレクション事始

—人材育成研究・実践のフロンティアから考える—

■講師



中原 淳 (東京大学 大学総合教育研究センター 准教授)
 東京大学教育学部卒業、大阪大学大学院人間科学研究科、メディア教育開発センター(現・放送大学)、マサチューセッツ工科大学客員研究員等を経て、2006年より現職。東京大学大学院学際情報学府准教授を兼務。大阪大学博士(人間科学)。「大人の学びを科学する」をテーマに、企業・組織における人々の学習・成長・コミュニケーション、リーダーシップについて研究。専門は経営学習論。著書に『職場学習論』『経営学習論』(東京大学出版会)などがある。



俣野 秀典 (高知大学 総合教育センター 講師)
 北陸先端科学技術大学院大学知識科学研究科修了。地域科学研究会・高等教育情報センター研究員を経て、2009年より現職。教育評価や教育方法を中心に、FDを含めた“Educational Development”に取り組む。教育プログラム開発部会長および課題探求実践セミナー分科会長として、課題探求型授業の開発・支援に携わる。専門は高等教育開発、ナレッジ・マネジメント(知識経営)。著書に『大学教員のためのルーブリック評価入門』(共訳、玉川大学出版部)がある。

■プログラム概要

近年、ブームと言ってよい程“リフレクション(振り返り)”が高等教育や人材開発界で注目されています。しかしながら、その意味や方法を理解し、実践している(組織として、教職員として、学生として)ケースはまだまだ少ないのが現状です。

そこで本シンポジウムでは、大学人(教職員・学生)の成長を確かなものにするために(SPODフォーラム 2014 サブテーマ)、「リフレクションとは何か?」「リフレクションをどのように行えばよいのか?」に正面から向き合います。

シンポジウムの前半は、人材育成研究および実践に関する最前線の事例を多数交えながら、振り返ることの意義・目的・効果・方法などを共有し、参加者の日々の実践における振り返りのヒントに気づく時間に充てられます。後半では、前半の内容を押さえつつ、現場(FD および SD の文脈)においてリフレクションを実践していくためのシナリオ(高等教育機関における最前線)を参加者全員の対話の中で創っていきます。

※リフレクション(reflection)は「省察」「内省」「振り返り」などと訳され、起こった事象や自身の行為を振り返ることを指します。

※このセッションは参加型で行います。セッションの最中、お近くの方とのディスカッションやエクササイズ等を行います。

■主な受講対象

学びにおける“リフレクション(振り返り)”とは何かを知りたい教職員
 組織の開発や自身の成長に関心のある教職員
 自身の授業で振り返りのプロセスを設けている／設けたい教員
 職場での業務に振り返りの手法を用いている／用いたい職員

■本プログラムの到達目標

1. リフレクション(振り返り)の目的を説明することができる。
2. リフレクションと参加者自らの体験を関係づけることができる。
3. 自らの組織／活動におけるリフレクション実施のヒントを持ち帰ることができる。

■日時・会場・受講定員

日 時 : 平成26年8月29日(金) 13:00~15:30
 会 場 : 高知大学 朝倉キャンパス 高知大学生生活協同組合 食堂スペース
 定 員 : 200名